中村俊定文庫
文庫 18
911

[illegible]

東京日本橋
萩壽庵閲
仝 春静庵

實録社寄題句合

凡句數四季混題
兼題合八千餘章

龍塘翁人書

實録社寄題の此冊子や春静庵
はじめとして諸般社友諸志願に
四方諸好士より寄られたる吟詠
八千余句に及ぶ中より猶撰者の参
評を乞ひとどみなも梓にまするのおから

いさゝかなる事とていてきて
何の稚とはいさよふ日数をへりて漸く
はたはら拙き精なく残上梓の資料
して返る事の鄙ふる人となれり
法神画にも叶ふ業なるらんかし

と肴のまゝ私序詞をとひと言
せよと葉雅老のもちて
応して云爾

明治三庚午秋

芳義

應需 雅老書

惺々暁斎

春之部

彰雪思庵撰

目出度て桜に勝り竹の里　モミチ　種山
鶯の鳴や梅に勝る春の声　加ノ本、素晴
打遣ふ人に風あり松代の春　アツマ、亦京
待うちは花の莟か咲ハ散さうて　宗、萬花
知らぬやら雪も水鶏なうれ春　一寸
初鶯に新玉の年の始哉　立
又ぬ年も名乗る桜の柳　ヤメラ、捨拾
来らしたる笑ひ始める春の空　青山、蕭河

消そ降雪もすゝらに海苔乃味、　村山
桐はるゝ雇もおとめ恵方の那　日本ハシ　野逸
温気なる桜も去年一年江　京　松風
麻かるや月にも雪の翁る哉、　幽心
梅かつら戻るも夜もあるは哉、　光麿
風渡て山にわれ住る朱みは李、　泰阿
花ハふる松の香して春の月　御京レ　里柳
又恵くなり行く暮の山　上　廿東　鳴
吹分る風に峰焼煙哉　ヤマトレ　桂司
春の氣来庭にのりに流れけり　上　廿　梅枝
橋に行かに近ひ小舟し戻り橋　廿菜レ　菊盛

涅槃会やをりと手を引人の秋 ヤマトレ 雪桂
やうやうと見る所やあかね咲雪 スキヤ、雪青
菜の花に香う新了指の森覚哉、 水錦
松島を見るとて明てはつ霞 仝
一二羽の家ちかき菜かう和鵜 仝
佛陀をも拝むはけぬ哉 仝
市中に学の居見回る都かな、 蓮 何
蓮生み宿にも来たり花の春 仝
清代の春詞ふ花見咲きけり程遠 茂竿 寄松 甫

花盛葦録

みちしゆく嵐も由なし春日和 ハマ 竹里
行尊や額子に船賃て起る鳥 仝
海苔采みる和田いなの花に薪屋茸 ミヤコ、秋江
峰に咲く草の舞薪の名をもつ花り 小ナキ川 素枝
田舟を綾おく天気や晴鶴 本丁 紫山
春の水末広なりて流れかな 梅徑
山城に雲なき春の中に日うれ 月スレ 蝶在
鳴きみ田のみ弥生蛙早部 エレシウ 鳴浦
探かみ花に色遠うや春きかや、 松風

蛙まつるゐ代や思ひの雪解時　エレシウ　音山

急拵や明日もうら若ゝ咲忘れ　梅守

蝶舞や人のうら秋平風の流く　梅秀

芽出しや若ゝふさあをも待卯月　一寸

春雨ぞ若もなしなの雲ま入　月更し　堂

囀鐘開れかくさぬ月哉家雄　東鳴

花の露夕下もちまし村雲まり　巴

飛かりみとうに近し花曇見　古雲

罪も奈き心や梅のつぼみ咲し　立

咲くさ風ぞやうめ花咲日和　旭勢

松咲旅は筆あさ蓮花の飛　重秀

散ぬふ雲の峰うや松の花　雨然

咲ふるし山すそにして暮る人　立

もろ風や月ゞく田麦咲　天錦

荻る花の明りを引や夜の雨　蓮何

華散ておちみ濡る人の術　家考　玉雪

字園へ梅咲の頃る日和宗雄　判　鳴浪

引らせる涼象や出る棋の花　日　村海

夏之部

旧竹葉撰

明やすき夜も幕木の雲のうれ　始末レ守　白

恵こ扇や篝火て打る蛍の出来　本丁　喜廼

男の贈りかを入手をさしれなり　ハマ　枕了ふ

夕皃や涼しをかあま戸一枚　旭本レ　子糸

移い蝉ゟ遠し樹の青みれ捨　古道

条りゝ秋ふ戻りて月まし　竹号

行先も涼しきも秋言や知らされ　アツマ、妻のり

咲風すまふく光る悟る古　立

牡丹花の抱く色なり紫婦人　芳レ　画堂

参ぞ結うを傾ふ家八重桐流ヶ錨　杉江

色あける雨に好みすやみのゝ笠　小ナギ川　寛乐

楚々へる舞ゆ進む行き鶴の角　柳甫

居る知や五尺のうけを笠のうち　南丝

来てく間も詠ふ進む夜明の月　蝶遊

帰りても見えても隠し彼のみ　東鳴

夜涼しやまく炭寛ゟ花の香里　ユシマ　錬ゝ

母衣蝋や子の世寄り眠り旅戻り　霞晴

実さゝ?や花の雲も鬼の輝き　アツコレ　如笑

みしる秋やまくら好きき月　ヨコ山丁　○　允

春の夢ハ去りて待ちあへし如宿哉　方鶴

名は誰や我のあらし菜畑の夜　芸何

守られ又ゝかふ乃ほ根かりた筆竹　蒼 蕉雨

金峯舎諸

思ひ入や虫の声をきゝ沈し波　素外

蛍の跡り田を見たし尾すそし　竿号

青傘や数を拍えて糠と針　フカ川 晉序

雪ふきて海ぬ月影きえし波の上　旬嵐

目に見る初雪を佳ら霞む一雨遠水鶴　川サキ 嵩抛

帰ろうし北海気のかたまりや松も寿　里寿

山桜や花々くハ子ちから家にまね北瀬　東鳴

峰ち奈の花咲かし伝まり什り　菊露

由ゐ風や鰭の香かきて影咲哉　雲秀

待ちはけ不蝶とゝかり南程あ葭　水鶴

母衣蜘や子の生年鳴く瑞きさ里　蒼 霽晴

花の盆遊ぬ帰らぬ鳥の巣しある　米 里得

出て来て庭ぬ鵬のとまりて郭公　仝 旧竹

穐之部

瞙草撰

露に遠く加乃申あり河里稲の花　金峯
汲あてゝ秋干ちいる杣乃の　両田
白梅乃ゝ末も猶り筆之あとし米　秋也し　萩月
啼つくる鹿や月影の方寺　古道
朝霧や大きれ松をふとり掃　あ附丁　郁
加乃陰しくて明る枝ある紅葉かれ　山名ハ之　露楓
菜屑こそ汲みに浮き寺の扇　八丁ホり　宗山
香ハ月の針に明ゆし夜乃菊　草の子
鳥の乱え飛須し雲の加えひくさ　調雨
顔多皺となく蒼乃年海　光里奴

此をも林しも京まふ明る野の枝　ヨコ山丁　周米
森がに雨あるさゝず以てら栄菊　さしおり鳴　備
都鳥の気にも清し月に袖、　秋也
あつ汲の流をかかる家鴨の枝　光慶
唯ゆ付てたたらい滞し撲　四キし　一牛
大空ハ静らけ子あるや秋の雲　守白
退いして立るきむし晴乃暮　上サ　素実
御きし立手に起き明る秋の綿　菊盛
見ふくら静みに清もむ露の庵　ユシマ　茶友
花ゝなる浮きしら之そ北月　アツマしや　英柚
行いさ乃あ浮やや岸乃戸、　水鶴
見も京の行の露の梅露　立

入る月きえてやうやう明る哉　竹棠

風さよく紅葉ちらし雨の庭　立

手枕に秋の夜長し露の音　スキヤル　柳眉

鳴にけり有明まかる秋の雲　蓮何

兼てより萬歳ハ葉の位乗ハ　マ　吉喜

無佛菴評

ひとりみて新酒をかけし節句かな　左ミ坊

来てもつきぬのも泊し秋の蝶　花甲レ　吾庵

揉去る葉を手に取る秋さびし　松堂

たなはたの淵や藻の別れ哉　スキヤ、寿逸

秋さびし高やの鶏の声きゝ　エレシウ　紫何

高き雲に黒く行かへり　雪寿

月影の古き垣根に鴫の声、　暁嵐

稲の穂のうつむき白し稲の花　上　サ　其月

ふる里や秋深き頃の秋　南悠

麻刈て高きや竹の露　松鶴、

露や朝の草の上　古笠

桐の葉落て淋しさまさりけり　キクサレ　稲庵

葉の香や土用の秋の色ある　文正

蕎麦の花白き地の物のと　琺項

冬之部

蓮日庵撰

正月も身あまり雲客之本丁　志芳

新りて小春垣ゐくれ雑の冬寺　橘山

初ゝ氷日当りや蕗の小はる咲ハカハレ　米寿

鈴を振てもちぬしれて子供らキクヽ、　貞雨

埋火やまくらはたる海うらやましアツマ、　鐘銖

拾ふ社と年ふる桐の火桶かな、　如雲

寒さ凌やきしなき唄の耳に付上けル　紀寿

隙和気て和夢乃備後鞍ゞ川四キレ　旭勢

冬されの日和あたゝか侘やれ樽の蜆ハクロ丁　舩風

年忘む人をさむや黒茶碗　竹窓

茶の花や御後亀ハ十ばかり　米竹

菊の蕾乃影を抜きて咲かば乳バクロ丁　象糸

坂下へ吹おろさる寒さ哉カンタ　泉山

餅蔵を供しけりせり枯尾花　和榜

偕やそれ咲雲の行の木垣スキヤレ　松笠

雪見れば庵屋根いれ冬しな　芝何

春中も梅に菊なる枯野かな　桂司

時の人のよう浴び年乃波　蓮何

月花をくらふも先まて楼アツマ、　寿堂　如笑

春静庵評

さひしさも梅咲までは神の留守　加ノ本ー　花梅女
雪の朝や枝ごし秋の残る松を　仝
にはかくれ風を通して冬構　東一
木からしや森より高き神の杉　秋乃、樹山
猿の子風出来て寒き雪の堂　旭ノ本、豊賀
鮭魚買ふて庵の奢りし年忘　蕉雨
雪折や市非以来のひと轄頃　甑千
仏の前は路かゝるの水水仙花　一ツ目　梅雄
小春日をこふさけし風の抄ひつきぬ　ツ丈レ　松游
朝顔も散らぬ真柘や浮標る　五ハシヽ　其流
唐人手の扇でついし岸くづる　廿ヒヤ　永二
茶の花や散るもうきれ夜寒　仝
寝る所も遊しきれぬ時雨かな　草生子
雲も出て掃くや雲の戻り道　一寸
幕串も捨てありし若菜　光雲
時雨るゝや何も都に見えけり　米孫
森は猶鶏も(?)いろく時雨かな　重秀
三方の霧や余所の霜に帰る学　斉齊
鴬聞てあをく心をつけし冬籠　雲晴
冬近信中にはたと指火かな　カレ丈　和雲
枯芦やまだなき舟の此れゆき世　一バレ　菜秀
夜明ぬ月霜に寄るゝ翁の味　山ヤ　露楓
雲晴は下雪なきてるみの月　ミヤコレ　秋江
芥も(?)飯より嘯て事は見　調雨

汐はしれ届りてぬる小川の鯽　耕支

白えきし萩ていやます一つし鈍　石鶴

ふ魚い命坊乃花く年ぬくる　蓮何

春風や居ミよ古りむかし紙　蕉雪 心

判　柳暁

声かきて声もゆるるしまひぬる　不老

ふ信きぬるせぬ雪の降ふりり

題　藻魚金撰　四季之降物

跋

降中を溝へしらき春まゐ人舟　志芽

暮らし山吹あれ夏の白　枯之　毎月

下駄はいて旅をつりはるれ雨　斉老

五月雨や京の切るゝ出て雲　霞晴

月影のはしれ新らしあしへ　蕗月

夕立や晴るゝ見せてかつかり　素伯

傘て受けて行あたふ鬼かな　三暁

雪の日や降さゆる形かい小字　永二

ゆえくと手に取ゆうきやれ雉　秋江

冬つらしう二日降りけなつの雨　一寸

男手み果もおり李宮庵け　紫宵

春雨の風こまもまくる夜かかかれ　左

あつさや松の花ん池を居て　遠妙　塘芸

霜堅ききしき西の通り路　上　廿　池柳

暁の月に徒てかへるやわかれしも　上サ　雨郭
時雨てもまさる森のあさ隠の松　古笠
大粒にかりて未枯らはしれ白　永鶴
之叫声も落してくる傘の雪　ミナミ丁　喜勇
初雪や宗治を何代か数へしき　蓑何

吉竹林評

渋柿や枝もみとりに見えて降　北月
ひとかゝけ摂待杖やまれ門　イナボレ　沢耳
世の中かゝるを白佐く寸郭　ホツカ川　仙雪
古るしを追はる雪のあしたかな　素遊
最もうめき夕まれもなし雪乃宿　巴
流るゝや時雨はしきく薄乃霧　スキヤレ　文石

佛像や郭も佇く東佐の紫鷲　守白
為めぐや雨乃家中於伴月和　如笑
冬白や積み日みとす峯乃松　之
蝶等や汲の素ぬるを霧の如く　川サキ　蒼拙
枝の音や夕上きむき場とまり　舟月
忘られ時なまりも宗の外之本　雪秀
雪一声まの中んをつもり計き　之
五月雨や像くらしめて附あらり　之
雅ひとく星の廣瀬雪の声　水鶴
大津や時雨るゝ路より雪白きす　竹栄
霧雨や枯はてる宿の旅の声　米　蓮何

春雨の様な道へ労を付て 大毬

稲の香や田の外に俄冷 遠州 補 鳴 浦

紅の襟の中へ柳なり、 松風

桃や春は見ての春にかな 上サ池 寿

花に似る雨とはいへと二月かな 寿 捻

月をさへ暮て行く秋まゝ 一 牛

はつ雪やまかせたる竹箒 松 郭

松に来る秋も彩る樹々や龍田姫 如 笑

人渡るまでうちぬ錦実 柳 糸

鮮て木にまて溶るつくしの郷 寿

さみたれ雨に宵や戸外寿 古 笠

所からや家あるハ宵の名残の跡 芽花 雨 悠

静さの濃なる雨しかれ秋を 重 系

時松の声のをと清くる寿の秋 永 能

見る中や霧の果須磨の波 竹 巣

松の声中の風は是の夏をきく 蓮 何

今日を秋道て川の如く時雨かな 校合 其蓼庵 芸 栄 瓶

彩る錦を涼しき峰を花の雨 彩 柳 曉

766
ヒ
ツ十

題浅能

貫ぬきてしら露あ弥さ玉　柳暁

猿沢の月をいさらせ能　同

鶯も宿もかけてちるや郭公　同

魚よせん鯖にまける秋茶かけ　同

水にもよれもや雪のみも似たかりん　同

言葉の秋月ちうは出して何ちる
葉の枝にまかれてこなさと
何らかとなきされて流るを又葉を
ちらなりけれ

手おらぬをいむで秋ちるや作り葉　柳暁

明治三庚午秋

書　蕣文翁写

画　猩々狂斎

彫刻　水心舎一半

企　柳暁蔵板

明治二十三年八月廿九日午後三時八十八分
初日ヨリ九十九日ニシテ

[illegible]

仝　林[illegible]

[illegible]

同　[illegible]

[illegible]

中村俊定文庫